『和泉式部日記』に見える作者意識と場面性

藤川晶子

はじめに

『和泉式部日記』（以下、『日記』と略称する）が内包する問題の一つとして、『日記』内での矛盾がある。その中でも日付の矛盾は誰しも容易に看取されることであり、長年にわたって注目されてきた。これは、『日記』内での出来事を記述そのままの形で繋げていくと、示される日次の枠からはみ出てしまう、というものである。このことについては従来、「主観的叙述が、時に裏づけであるはずの客観的日次表現を超えようと」した結果であると結論付けられたり[*1]、「獲得した〈女〉の内面を秩序づける時に」日次の矛盾をはじめとする「虚構性」が作者の無意識のうちに生じたものであるなど[*2]と考察されてきた。これらの説を逆に返せば、あたかも日次表記が『日記』の中心人物和泉式部の感情表白とは次元を異にした客観的な外枠であるかのように扱われてきたと言える。しかし、実際には作者は敢えて具体的な時節を示す日次表記を確かな意図をもって主体的に選び取っていたとは考えられないだろうか。

一方、久保木寿子氏は「日記を貫く和歌的な場面構成の論理」に言及され[*3]、「時には日次の枠に矛盾を来すほど、恋の場面設定に主眼を置いて構成されている」と説いておられる。確かに、『日記』の各場面に和歌的論理が反映されていることは疑いない。しかし、久保木氏ご自身も提示されているように、八月石山参詣の場面など、「和歌的な場面構成の論理」だけでは処理できない部分もあり、さらに異なった視点からの考察が必要だと思われる。

そこで、本論では、まず、三人称表現「女」の使用箇所に焦点をあて、そこに見られる作者の意図を導き出し、次いで日次表記の必然性へと迫っていく。そしてそれらを通じて改めて『日記』に見える作者意識と場面性とに言及しようとするものである。

一、三人称表現「女」に見る作者意識

『日記』内で、主人公である和泉式部の言動を語るとき、まま、「女」という三人称表現がなされることは、この『日記』を位置づける上で、非常に大きな問題を投げかけてきた。『日記』が、和泉式部ではなく第三者の作ではないかという発想の根拠の一つも、この三人称表現にあるといってよい。しかし、たとえば、織田裕子氏[*4]によって、「女」が主語としてしか用いられないこと、その下には独白や心理描写が続くことなどが早くに指摘され、『日記』が「女」の意識の流れに沿って書かれている様相が論究された。つまり、和泉式部が作者であることが、「女」という三人称使用によって、逆に明白になっているというのである。今、ここで、『日記』作者について詳細な言及をする余裕はないが、仮に和泉式部自身が作者であるとして、何故に敢えて「女」という表現をとらなければならなかったかということは、『日記』成立を考える上での大きなポイントであろう。

『日記』において和泉式部の言動の主語に「女」が使用される初例は、帥宮が初めて和泉式部を訪れた場面である。[*5]

①……「かくなむ」と言はせたまへれば、女、いとびなき心地すれど、「無しと聞こえさすべきにもあらず、……（中略）……ものばかり聞こえん」と思ひて、……

帥宮の初来訪に対して、「女」は「いとびなき心地」つまり、大変具合の悪い思いをする。結果的には帥宮を自邸に招き入れるのであるが、この時点では決して「女」の気持ちと帥宮のそれとがかみ合っているとは言えまい。

続いて、二人の交際が始まって半月ほど経った頃の記事である。

②つごもりの日、女、

ほととぎすよにかくれたる忍び音をいつかは聞かん今日も過ぎなば

と聞こえさせたれど、人々あまたさぶらひけるほどにて、え御覧ぜさせず。……（中略）……二三日ありて忍びてわたらせたまへり。女は、ものへ参らんとて精進したるうちに、「いと間遠なるも心ざしなきなめり」と思へば、ことにものなども聞こえで、仏にことつけたてまつりて、明かしつ。

場面冒頭、帥宮の訪れを待ちかねた「女」の方から、ほととぎすに帥宮をなぞらえた詠を贈るのであるが、宮は「え御覧ぜさせず」、さらに、「二三日」後、やはり「忍びて」やってきた宮に対し、「女」は精進中を口実に素っ気ない態度をとる場面であり、「女」と帥宮の気持ちや言動はかみ合っていない。さらに、五月に入っての「まきの戸口」をめぐる贈答に至る場面は、二人の食い違いを如実に示

している。

③宮、例のしのびておはしまいたり。女、さしもやはと思ふうちに、日ごろのおこなひに困じてうちまどろみたるほどに、門をたたくに、聞きつくる人もなし。聞こしめすことどもあれば、人のあるにや、とおぼしめして、やをら帰らせたまひて、つとめて、（「まきの戸口」の語を使った歌の贈答）……

宮の来訪に対し、「うちまどろ」んでいた「女」邸の者がだれも気付かず、結局宮は帰ってしまう、といった、二人の完全な行き違いを描いているのだが、場面冒頭に「宮」とあり、「女」と対照的に用いられていることに気付く。いったい「宮」とは普通名詞ではある。しかし、『日記』の大半において和泉式部とおぼしき女性と帥宮としか登場しない故に、たとえば敬語の使われ方によって動作の主体や対象が示唆されている中で、敢えて「宮」と明示している箇所には注目すべきであろう。やはり、「宮」に対する「女」という、二人の対応関係が特に強調されているのではないか。

さて、これまでは、「女」という三人称による主語表示をしている部分が、帥宮との感情や立場の食い違いを示す例ばかりであったが、先の③の事件のすぐ後に描かれた場面以降は様子が一変する。

④雨うち降りていとつれづれなる日ごろ、女は雲間なきながめに、世の中をいかになりぬるならんとつきせずながめて、「すきごとする人々はあまたあれど、ただ今はともかくも思はぬを。世の人はさまざまに言ふめれど、身のあればこそ」と思ひて過ぐす。宮より、「雨のつれづれはいかに」とて、

おほかたにさみだるるとや思ふらん君恋ひわたる今日のながめを

とあれば、をり過ぐしたまはぬををかしと思ふ。

「女」が五月雨に誘われて種々の思いに耽っている折しも、「宮」からの文が来る、という場面であり、物理的に離れてはいるものの、心情の上では「女」と「宮」とが結びついていることが示される。さらに、「宮」からの文を見た「女」は「をり過ぐしたまはぬををかし」と感じており、二人の感覚的一致が明らかにされているのである。

この後、乳母による諫言や故為尊親王の一周忌などがあり、和泉式部のもとから足が遠のいた帥宮であったが、ある月の美しい夜、式部を車で人けのない廊に誘い出す。次に「女」の語が見えるのは、その帰り道の描写の中である。

⑤……ほかにありと人の見んもあいなくなん」とてとどまらせたまひぬ。女、道すがら、「あやしのありきや、人いかに思はむ」と思ふ。あけぼのの御姿のなべてならず見えつるも、思ひ出でられて、（「女」の贈歌）……

人目を気にして、廊に残った帥宮に対し、帰途についた「女」の自省が記される。ここでも、「宮」対「女」の図式が明らかであり、「あけぼのの御姿」を思い出して宮への溢れる思いを抑えがたい「女」が贈歌をする場面へと続く。先の④の場合ほど明白な形では描かれていないが、ここでもやはり、宮と「女」の絶ちがたい繋がりが想起される。

『日記』ではこれ以降も和泉式部の浮き名のために帥宮との関係がぎくしゃくする経緯が記されるが、④の五月雨をめぐる贈答以来、二人の共感部分はより大きくなっていくようである。そのことを強く示すのが次に採り上げる六月「月の明かき夜」の場面である。

⑥かくて、後もなほ間遠なり。月の明かき夜うち臥して、「うらやましくも」などながめらるれば、宮に聞こゆ。

月を見て荒れたる宿にながむとは見に来ぬまでもたれに告げよと

樋洗童して、「右近の尉にさしとらせて来」とてやる。御前に人々して、御物語しておはしますほどなりけり。人まかでなどして、右近の尉、さし出でたれば、「例の、車に装束させよ」とて、おはします。女は、まだ端に月ながめてゐたるほどに人の入り来れば、……（中略）……ただ、御扇に文を置きて「御使の取らで参りにければ」とて、さし出でさせたまへり。女、もの聞こえんにもほど遠くてびんなければ、扇をさし出でて取りつ。宮も、上りなむ、とおぼしたり。前栽のをかしきなかにありかせたまひて、「人は草葉の露なれや」などのたまふ。いとなまめかし。……

「うらやましくも」と月を見た和泉式部は、その感慨をまず「宮」に贈ろうと考え、歌にする。そしてその歌を読んだ帥宮が式部のもとを訪れる決意をするのである。ここでも、二人の心情的一致が描かれていると見てよいであろう。また、「女は、まだ端に……」の部分を境に、帥宮邸から和泉式部邸へと場面が転換しているのが知られるのに加え、扇を差し出して文を受け取る「女」に対し、「宮も」女の許に上りたく思っているなど、やはり二人の心の接近が示されているのである。

ところで、「女」の語が用いられたときから、場面―喩えて言うならば、カメラアングル―が変化することも①～⑥の例すべてに共通している。これは「女」と三人称表現し、主人公和泉式部を客観視することと相俟って、『日記』内において一つの場面を主人公の視点とは別の、客観的な立場で構成しようとする作者意識の表れであることは疑いない。たとえば⑥の場面が、少し形を変えて『古本説話集』に採録されていることも、この部分の場面性を裏付けする事象であると言えよう。

さて、『日記』は八月に入って、和泉式部が石山詣でをする場面から、第二幕を迎える。ここで、「第二幕」と言ったのは『日記』冒頭部との照応が見られるからである。

⑦かかるほどに八月にもなりぬれば、つれづれもなぐさめむとて、石山に詣でて七日ばかりあらんとて、詣でぬ。宮、「久しうもなりぬるかな」とおぼして、御文つかはすに、童、「一日まかりてさぶらひしかば、石山になんこのごろおはしますなる」と申さすれば、「さは、今日は暮れぬ、つとめてまかれ」とて、御文書かせたまひて、賜はせて、石山に行きたれば、仏の御前にはあらで、ふるさとのみ恋しくて、……（中略）……高欄のしものかたに人のけはひのすれば、あやしくて、見おろしたれば、この童なり。あはれに思ひかけぬところに来たれば、「なにぞ」と問はすれば、御文さし出でたるも、つねよりもふと引き開けて見れば、……

『日記』冒頭部では、「近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰ならんと思」って、和泉式部が目をやると、故宮に仕えた小舎人童であった、という設定がされているが、この石山の場面においても、場所が「高欄のしものかた」である以外は同様である。その時の「あはれに思ひかけぬところに来たれば」という和泉式部の心情描写も、冒頭部の「あはれにもののおぼゆるほどに来たれば」と酷似している。反面、冒頭部では突然の小舎人童の出現に和泉式部が「などか久しく見えざりつる」と問いかけるのに対して、⑦では、帥宮が和泉式部を思い「久しうもなりぬるかな」と感慨を洩らし、小舎人童を介して文を贈る設定がなされている。つまり、冒頭部では、童の訪れを通して故為尊親王の存在こそ感じられはすれ、未だ、その弟である帥宮と和泉式部との関係の成立を知る由は全くないが、この八月石山参詣の時点では、すでに帥宮と和泉式部の関係が成立し、ある程度安定していることが前提となっており、冒頭部との表現上の類似や呼応から、『日記』第二幕の始まりであるように思われるのである。それは、この石山参詣のエピソードが和泉式部の「山を出でて暗き道にぞたどり来し今ひとたびのあふことにより」の歌によって閉じられていることでも跡付けられる。和泉式部は、帥宮との逢瀬を何にも代え難いものとして優先したのである。そしてこの石山参詣以降、二人の絆を結びつける印象的な場面が連続し、『日記』終末の和泉式部宮邸入りへと続く。

まず、九月有明の月の場面が挙げられる。

⑧九月二十日あまりばかりの有明の月に御目さまして、「いみじく久しうもなりにけるかな。あはれ、この月は見るらんかし、人やあるらん」とおぼせど、例の童ばかりを御供にておはしまして、門をたたかせたまふに、女、目を覚ましてよろづ思ひつづ

け臥したるほどなりけり。……（中略・宮の訪れ）……おなじ心にまだ寝ざりける人かな、誰ならん」と思ふ。からうじて起きて、「人もなかりけり。そら耳をこそ聞きおはさうじて、夜のほどろにまどはかさるる。騒がしの殿のおもとたちや」とてまた寝ぬ。女は寝で、やがて明かしつ。……（中略―女が手習文を書き、宮に贈ろうと思い立つ―）……宮わたりにや聞こえましと思ふに。たてまつりたれば、うち見たまひて、かひなくはおぼされねど、「ながめるたらんにふとやらん」とおぼして、つかはす。女、ながめ出だしてゐたるにもて来たれば、あへなき心地して、引き開けたれば、……（中略―宮からの五首の返歌―）……とあるに、なほもの聞こえさせたるかひはありかし。

ここでも和泉式部の言動の主語が「女」で統一されており、客観視しようとする作者の姿勢が感じられる。また、「おなじ心にまだ寝ざりける人かな」と「女」が思った来訪者は、とりもなおさず帥宮である。「女」邸の下男が寝呆けていたために、この夜の二人の逢瀬は成立しなかったが、以前のようにそれが二人の関係を揺るがす大問題に発展することもない。さらに、自らの手習文に対する宮の五首の返歌を見た「女」が「なほもの聞こえさせたるかひはありかし」と嘆じているなど、和泉式部と帥宮の発想や感じ方の一致・共感が一層強調されているのが明らかである。さらに、この中に「女」という表現が三度出てくるが、一度目と三度目の「女」については、それを境に宮の立場から「女」の立場へと場面の転換が行われていることが知られる。また、「宮」と「女」とが対になって扱われることで、月をきっかけに思いに耽る二人の共通点や、文を贈るタイミングの微妙さが表出されているのも見逃せない。作者が有明の月の一夜をめぐる一連のストーリーを記すにあたって、場面性をかなり意識していると同時に、和泉式部と帥宮二人の心情面での一致を巧みに描出しようとしていることが窺い知られるのである。

次に、「手枕の袖」を詠み込んだ一連の贈答歌が交わされる部分を挙げたい。

⑨かくいふほどに、十月にもなりぬ。十月十日ほどにおはしたり。奥は暗くて怖ろしければ、端近くうち臥させたまひて、あはれなることのかぎりのたまはするに、かひなくはあらず。月は曇り曇りしぐるるほどなり。わざとあはれなることのかぎりをつくり出でたるやうなるに、思ひ乱るる心地はいとそぞろ寒きに、宮も御覧じて、「人のびなげにのみ言ふを、あやしきわざかな、ここにかくてあるよ」などおぼす。あはれにおぼされて、女寝たるやうにて思ひ乱れて臥したるを、おしおどろかせたまひて、

時雨にも露にもあてで寝たる夜をあやしくぬるる手枕の袖

とのたまへど、よろづにもののみわりなくおぼえて御いらへすべき心地もせねば、ものも聞こえで、ただ月かげに涙の落つるを、

あはれと御覧じて、……

この後しばらくの間、帥宮の「時雨にも……」の歌をきっかけに、二人は「手枕の袖」を詠み込んだ歌を贈答することになるのだが、注目すべきは、この場面においてもやはり、「宮」「女」の人称が用いられており、同時に、和泉式部と帥宮の、感情面における無意識裡の一致が強く表されていることである。「思ひ乱るる」「女」に対して「宮も」共感を寄せ、現に目の前にいる「女」を「ここにかくてあるよ」と、より愛おしく感じている。そしてこの後、「ただ月かげに涙の落つる」のを心苦しく思った「宮」が、和泉式部に対して宮邸入りを切り出すことになるのである。もとより、その宮邸入りを誘う帥宮の言葉の中にも「おなじ心に物語聞こえてあらば慰むことやある、と思ふなり」とあり、『日記』において、二人の「おなじ心」は大きな要として機能していることは明白である。そして遂に「女」も宮邸入りに心を傾かせるようになる。

⑩その夜の月のいみじう明かく澄みて、ここにもかしこにもながめ明かして、つとめて、例の御文つかはさんとて、「童参りたりや」と問はせたまふほどに、女も、霜のいと白きにおどろかされてや、

手枕の袖にも霜はおきてけり今朝うち見れば白妙にして

と聞こえたり。「ねたう先ぜられぬる」とおぼして、

つま恋ふとおき明かしつる霜なれば

とのたまはせたる、今ぞ人参りたれば、御気色あしうて、……

この後、童の遅参をめぐって腹立てた宮を「女」が取りなし、再び「手枕の袖」を織り込んだ歌を贈答することで一件落着するのであるが、当該事件の契機となるのが、澄みわたる月に思いを馳せて夜を明かした朝に目にした霜の白さに、帥宮ばかりでなく「女も」心を奪われたせいであると記される。また、ここで初めて宮が和泉式部を「つま」と称しており、二人の心の結びつきも最早、最高潮に達した感がある。実際『日記』ではこの後、逡巡しながらも和泉式部が宮邸入りを決意するに至っている。以来、小さな事件はあるものの、帥宮から再度、宮邸入りを促す言があるなど、二人の気持ちはひたすら完全な一体化へ向けて進んでゆく。そして、十月下旬と思われるある日、帥宮から

我ひとり思ふ思ひはかひもなしおなじ心に君もあらなん

の歌が贈られ、和泉式部も、

君は君我は我ともへだてねば心々にあらむものかは

と返す。二人はお互いの心情面での一致を疑うことなく詠み出すのである。

さらに、この直後の場面においても「女」の語が見出せる。

⑪かくて、女‖、かぜにや、おどろおどろしうはあらねどなやめば、時々問はせたまふ。よろしくなりてあるほどに、「いかがある」と問はせたまへれば、「すこしよろしうなりにてはべり。しばし生きてはべらばやと思ひたまふるこそ罪深く。さるは、

絶えしころ絶えねと思ひし玉の緒の君によりまた惜しまるかな」

とあれば、「いみじきことかな、返す返すも」とて、

玉の緒の絶えんものかは契りおきしなかに心は結びこめてき

この最後の贈答歌によっても二人の一心同体を願う心がますます強くなっているのは明らかなのである。

こうして、①～⑪の場面を検討してきた結果知られるように、三人称表現「女」の陰には、やはり作者の意図的な思考が働いていると見るよりほかはない。「女」という主語提示が、『日記』冒頭には見られず、帥宮の和泉式部邸来訪時に初出するのも、実質的な二人の関わりが『日記』の主題となっており、作者はそこに場面としての独立性を与えたかったということを示唆するものではないか。そして、今まで採り上げたほとんどの例において、「女」と「宮」とを対比的に示しながら、①～③ではその食い違いが、④以降は二人の共感と、その強まっていく様が描出されていることも見逃せないのである。

さて、『日記』において、最後に「女」の語が見えるのは、十一月に入り、宮邸入りも目前に迫ったある日、帥宮が将来の出家の可能性を和泉式部に洩らした、その直後の部分である。

⑫女‖は、そののち、もののみあはれにおぼえ、嘆きのみせらる。

「とく急ぎ立ちたらましかば」と思ふ。昼つかた、御文あり。見れば、

あな恋し今も見てしが山がつの垣ほに咲けるやまとなでしこ

「あな、ものぐるほし」と言はれて、

恋しくは来ても見よかしちはやぶる神のいさむる道ならなくに

と聞こえたれば、うち笑ませたまひて御覧ず。……

先の宮の歌は『古今集』恋四所収の読み人知らずの歌であり、「女」の返歌も『伊勢物語』七一段のそれを利用したものである。宮は「女」の素早い応酬に満足し、「うち笑ませたまひて御覧」になる。ここでも二人の鋭い機知は確実に噛み合っており、繊細微妙な感覚的一致が読みとれる。この後二人は畳みかけるように歌の贈答を重ねている。先学の意見の中には、この古歌贈答をはじめとする二人の和歌応酬の部分が、『日記』中に記すべき素材が乏しくなったが為の歌の羅列であり、内容的には薄いと判じられている向きもあるようだが、決してそうではなく、最早お互いに完璧な信頼関係を築

いたからこその愛情の交歓の表出と言えるのではないだろうか。その証拠にこの直後、和泉式部の宮邸入りが敢行されるのである。

このように考えてくると、『日記』中に用いられた三人称「女」を通じて、帥宮と和泉式部との、次第に築き上げられた共感と結びつきを、そして、二人をめぐる種々の事件を、客観的立場をとり、場面性を付与しながら描出しようとする作者意識が否応なく看取されるのである。

二、日次表記と描出素材との関係に見る作者意識

ところで、前章で採り上げた①～⑫の場面のうち、②⑦⑧⑨の四つにおいて、場面冒頭に月日を示す表記がされていることに気付く。②においては、「（四月）つごもりの日」、⑦では「八月」、⑧は、諸本間に異同はあるものの、三条西家本に従えば、「九月二十日あまりばかり」とある。そして⑨では「十月十日ほど」となっている。また、③④の場面は前述したように、『日記』内において連続して配されているのであるが、④の場面の終了直後に、これも諸本間で異同がある部分ではあるが、「五月五日になりぬ。」と具体的日付の表記がされている。いったい現存『日記』において、当該場面の具体的な時節を示す日次表記は、冒頭の「四月十よ日」に始まって、「（四月）つごもりの日」「五月五日」「七月七日」「（七月）つごもりがた」「八月」「（八月）つごもりがた」「九月二十あまりばかり」「（九月）つごもりがた」「十月十日ほど」「十一月ついたちごろ」と続き、和泉式部が帥宮邸に入る「十二月十八日」、そして、宮邸入り後の「年かへりて、正月一日」[*6]が最後であり、総じて十三カ所を数える。その中でも、単に「月のおわりごろ」であることを比較的曖昧に示す「つごもりがた」を除くと、そのほとんどの例が第一章で採り上げた場面に重なってくることが知られるのであり、これを単なる偶然として見過ごすことは出来まい。

また、前章で採り上げることがなかった「七月七日」の場面にしても、

かくいふほどに、七月になりぬ。七日、すきごとどもする人のもとより、たなばた、ひこぼしといふことどもあまたあれど、目も立たず。「かかるをりに宮の過ごさずのたまはせしものを。げにおぼしめし忘れにけるかな」と思ふほどにぞ、御文ある。……（宮の贈歌）……「さはいへど過ごしたまはざめるは」と思ふも、をかしうて、……（和泉式部の返歌）……とあるを御覧じても、なほえ思ひ放つまじうおぼす。

とあるように、前章で採り上げた他の場面と同じく、二人の和歌的才知や情趣に対する姿勢の共通性からくるお互いへの信頼感が、七夕の日の歌の贈答をめぐって明確に記されている。やはり、日次表

記と場面性、そして作者の意図したであろう「二人の共感・心情面での一致」の表出とは、深い関係がありそうである。

さて一方、先述したように、『日記』において、四月から翌年一月に至るまでの日次表記がある中で、「六月」の到来を示す記述のみが見られないのも特筆すべきである。もちろん「現存の形においては」という条件付きではあるが、しかし、六月十三日には故為尊親王の一周忌が催されたはずであることを考えると、作者が故意に六月の記述を避けたのではないかとも思えてくるのである。

確かに、作品としての『日記』の記事と史実とを同列に扱うべきではないし、実際のところ、和泉式部と為尊親王が恋愛関係にあったのかどうかについても疑問が呈されている。しかし、作者が『日記』冒頭部において故為尊親王の影を匂わせているのは明らかであり、「六月」の表記が省かれていることも、為尊親王との関係を底流とするがために、敢えてその存在を想起させる時節の表記や、当該時期の出来事の描出を控えたためと考えるのは過言であろうか。

加えてここで注目したいのは、前章で採り上げた場面の中で、日次表記が存するものはもとより、それ以外の場面においても、「月」の持つ役割が極めて大きいことである。

『日記』全体にわたって「月」を描く部分が多いことは周知の通りであるが、たとえば、①の、帥宮と和泉式部の初めての逢瀬を記す部分について言えば、前章にて掲げた一節のすぐ後に「月さし出でぬ。いと明かし。」とあり、このことが帥宮を和泉式部の許に忍び込ませる大きな契機となっている。また、⑤の同車行の場面では、そもそも和泉式部が人けのない廊に降り立った原因が「月もいと明かければ、『下りね』としひてのたまへば、あさましきやうにて下りぬ。」と記される。さらに⑥では、「間遠」な状態の中で、「月の明かき」ことが和泉式部に歌を詠ませる契機となり、その結果、帥宮が和泉式部のもとを訪れ、親密な語らいのひとときを送ることになるのである。続いて⑧の九月有明のある日。前章で掲げた一節からも知られるように、二人はお互いに有明の月の美しさに眺め入っていたことが、逢瀬を成立させるに至っている。

ところで、⑨の「十月十日ほど」においては、「曇り曇りしぐるるほど」の月が描かれており、今までの「明るく澄んだ月」とは様相を異にする。このときの和泉式部は「思ひ乱るる心地はいとそぞろ寒き」状態であり、帥宮が傍らにいるにもかかわらず、わけもなく湧き出る不安や悲しさに溺れている。対する宮も、そんな和泉式部の姿に心打たれ「あはれ」を催しており、ここから「手枕の袖」のフレーズが誕生するのである。

こうしてみると、描かれた「月」そのものが、和泉式部と帥宮二人の心の状態を反映していると思えてならない。つまり、「明るく

澄んだ月」の時は、二人の逢瀬が成立し、お互いの心が溶け合い、一体化していることを示すのに対し、「曇る月」の場合は、心もすっきりせず、不安や物思いに満ちている状態を表出しているのではないか、ということである。このことは、先の⑨に続く⑩の場面においては、「いみじう明かく澄」む月が描かれていることにも認められる。前章でも言及したように、その月影に照らし出された霜の白さに新鮮さを感じて二人は同じように歌を詠んでいる。その後、童の遅参事件はあるものの、この一連のストーリーにおける二人は「手枕の袖」を介在させながら非常に和んだひとときを共有しており、宮が初めて和泉式部を「つま」と呼ぶなど、そこには微塵も不安の影を感じさせない。そして、二人の恋の結晶とも言うべき宮邸入りの日も、「十二月十八日、月いとよきほど」であり、居待ち月の美しさが描かれているのである。

ところで、前章にて『日記』第二幕の始まりと定義づけた⑦の石山参籠の場面には、前後の記事とは異なり、月を示す記述がされていない。たとえば、②の四月末日の一節では、「ほととぎす」を帥宮に喩えて詠出した和泉式部歌が中心的事項であり、敢えて月の存在に言及する必然性も無かろうが、中秋の名月の時節である陰暦八月の記事に、作品中に頻出する月の描写が見当たらないのは不自然ではないだろうか。

石山は周知のように、平安時代、観音信仰の聖地として知られたところであり、和歌においても藤原長能の「都にも人や待つらむ石山の峰に残れる秋の夜の月」（新古今集・雑上所収）や、高遠の「このたびも憂き身をかへて出づべくは雲隠してよ石山の月」（高遠集所収）が「石山の月」を詠じているのを考慮すれば、あるいは『日記』作者が敢えて八月石山参籠の記事に月を描かなかったのではないか、それによって、和泉式部の心における帥宮の不在とその再生とを表そうとしたのではないかと思えてくる。ならばこのことも、八月石山参籠を『日記』第二幕の始まりとして位置づける要因たりうるであろう。

このように、前章で採り上げた各々の場面のほとんどに日次表記による具体性が付与されていると同時に、「月」の描出の如何によって帥宮と和泉式部の心理的距離が巧みに記し分けられているとすれば、そこにそれぞれのエピソードに現実味を持たせ、かつ場面性を与えて客観的に描出しようとする作者意識が看取されるのではなかろうか。そして、このことが『日記』成立の経緯をつかむ一つの手がかりになりそうである。

さてここで、日次表記のある一節を通覧していると、ある奇妙な法則性があることに気付く。七夕の日と、八月石山参籠との間に、「つごもりがた」と曖昧に時期設定された記事が挟み込まれている

ことである。同様に、石山参籠と「九月二十日あまりばかり」の間、及び「九月二十日あまりばかり」と「十月十日ほど」の間にも「つごもりがた」と書かれた一場面が描かれているのが知られる。『日記』の流れに従えば、順に七月つごもりがた、八月つごもりがた、九月つごもりがたということになるが、七夕、八月石山参籠、九月有明の月、十月十日のそれぞれの場面が、今までに検討してきたように、かなりの場面性をもって帥宮と和泉式部との共感を描出する体であるのに対して、この「つごもりがた」の記事の趣は異なっている。

まず、「（七月）つごもりがた」の場面を挙げてみる。

つごもりがたに、「いとおぼつかなくなりにけるを、などか時々は。人数におぼさぬなめり」とあれば、女、[*7]

寝覚めねば聞かぬなるらん荻風は吹かざらめやは秋の夜な夜な

と聞こえたれば、たち返り、「あが君や、寝覚めとか。『物思ふ時は』とぞ。おろかに。

荻風は吹かばいも寝で今よりぞおどろかすかと聞くべかりける」

「いとおぼつかなく」なったある日の二人の贈答を示しているが、実際に逢ってはおらず、言葉の応酬だけにとどまっている。そしてこの後、「二日ばかりありて」帥宮の突然の来訪によって逢瀬が成立するのであるが、「なにとなきことのたまはせて」宮は帰ってしまう。その後も二人の間で歌の贈答はあるものの、それを作者は「あはれにはかなく、頼むべくもなきかやうのはかなしごとに、世の中を慰めてあるも、うち思へばあさましう」と記しており、ふと感じたむなしさや情けなさが前面に出されているのである。

続いて「（八月）つごもりがた」の場面である。

つごもりがたに、風いたく吹きて野分だちて、雨など降るに、つねよりももの心細くて、ながむるに、例のをり知り顔にのたまはせたるに、日ごろの罪も許し聞こえぬべし。

嘆きつつ秋のみ空をながむれば雲うちさわぎ風そはげしき

御返し

秋風は気色吹くだに悲しきにかき曇る日はいふかたぞなき

「げにさぞあらむかし」とおぼせど、例のほどへぬ。

ここでも二人は歌の贈答はなしえているものの、逢瀬には至っていない。和泉式部の歌に同情と共感を示した帥宮ではあるが、「例のほどへぬ」とあるように、式部の許を訪れることはなく過ぎてしまったと書かれているのである。

「（九月）つごもりがた」の事件にも似通った点が感じられる。

かくて、つごもりがたにぞ御文ある。日ごろのおぼつかなさな

ど言ひて、「あやしきことなれど、……（宮が和泉式部に対し、身近に接していた女との別れに際して贈るべき歌の代詠を依頼する）……」とあり。「あな、したり顔」と思へど、「さはえ聞こゆまじ」と聞こえんもいとさかしければ、「のたまはせたることはいかでか」とばかりにて、……

一風変わった代詠依頼の顛末が記されており、和泉式部はこの後、しぶしぶながら申し出を承諾し歌を作るのであるが、同時に、「したり顔」の宮に対する恨み言をも詠み込んだ歌を差し出している。対する宮は、言い訳半分に、そんな和泉式部をなだめる歌を返す。これはもちろん、親しさ故の出来事ではあるが、この場合も二人が逢瀬を持つことはおろか、今まで採り上げてきた場面に見えるような完全な心情の一致や共感を明白に描き出すことはしていないのである。

こうして見てくると、「つごもりがた」として記される場面に共通する性質として、決して二人の食い違いや別離を描くものではないが、帥宮と和泉式部相互の完全な共感や一体感を、場面性を付与させながら描き上げているのでもない、という点が看取される。読み取れるのは、変わりのない日常の一環として、歌の贈答のみを行う二人の姿である。しかし、これら「つごもりがた」の次には、必ず場面性豊かな記事が続いている。このことはすなわち、「つごもりがた」として比較的曖昧に時節を設定し描かれた場面が、前章で採り上げたような、いわゆる大事件と大事件とを繋ぐ「幕間」とでも言うべき役割を担っていることを示すのではなかろうか。つまり作者は「大場面」をまず構想・設定し、その間を繋ぐものとして「つごもりがた」と、さほど時期を特定しない形で「小場面」を挿入した、とは考えられないだろうか。

同様の例として、「十一月ついたちごろ」の記事も挙げられる。

十一月ついたちごろ、雪のいたく降る日、

神代よりふりはてにける雪なれば今日はことにもめづらしきかな

御返し、

初雪といづれの冬も見るままにめづらしげなき身のみふりつつ

など、よしなしごとに明かし暮らす。

ここでは「十一月ついたちごろ」と、月の変わったことを明示する割合具体的な日次表記がなされているが、描かれているのは、初雪をめぐる何と言うこともない二人の贈答であり、それを「よしなしごと」であるとしている点で、先の「つごもりがた」の各場面に共通している。この「十一月ついたちごろ」の次になされる日次表記は和泉式部が宮邸入りする当日の「十二月十八日」であることを考

え合わせると、やはりこの十一月の場面も、宮邸入りという「大場面」を目前に控えたある日を描く、一つの「小場面」であると言えよう。

以上のような考察を重ねてくると、『日記』作者が、日次表記を明確な意識をもって選択し、「月」を中心として挙げられる各場面での描出素材との関連をも細密に考慮しながら、具体性や臨場感に富んだ場面を客観的な立場から築き上げようとしていることが知られる。そして、そこで作者が最も強調したかったことは、帥宮と和泉式部二人がかちえた心情面での一体感である。すなわち、『日記』作成にあたって作者はまず、これらの「大場面」の構想と配置を練ったとは考えられまいか。

むすび

冒頭でも述べたように、従来、『日記』は「女」の意識の流れに沿って描かれており、その感情に突き動かされて叙述していくうちに、客観的な日次表記から逸脱する結果となり、矛盾と思える部分が生じた、とするのが主流を占めてきた。また、日次表記は、「女」と一体化した作者和泉式部が、その内面を吐露し、作品化する際の形式上の手段として用いたに過ぎないかのように論じられてきた。冒頭で掲げた久保木氏論においても指摘されているが、このような発想は、『日記』内のある場面と次に続く場面とが順を追って書かれ、現存の形に成ったと考えればこそのものである。すなわち従来は、『日記』を「冒頭部から直線的に、時間の流れを追いながら」読むのが正しい、という大前提に立っていたのではなかろうか。

しかし、本論で詳述してきたように、必ずしも『日記』作者の意識が「冒頭部から直線的に」終末部へ移行していると考える必然性はない。たとえば、従来言われてきた「矛盾」の一つに、現存『日記』の流れに従えば、「十月」の記事としてしか捉えようのない「秋の夜の月」をめぐる歌の贈答がある。これなども、「大場面」を繋げる「小場面」の一つとして挿入されたがために、前後の記事との関連に矛盾と思える現象が生じた例であると見なせるのではないだろうか。

少なくともここで言えることは、『日記』作者が場面性を意識して描出した部分が、それぞれにまとまりを持った形で『日記』内部に散見されることである。『日記』の各場面が独立して説話化される傾向の強いこと[*8]も、このような性質に根差しているものと思われる。

あくまでも『日記』は、和泉式部の立場から描かれた作品であるに違いはない。しかし、その内部を検証すれば、主人公と一体化した目を持つ作者がただ、出来事を日次に沿って羅列的に記したわけ

ではなく、作品化へ向けての相当な作者意識を働かせていたであろうこと、そしてその中で、「女」と「宮」との心理面での限りない一体感を示そうと試みたことが推察されるのである。

注

＊1　鈴木一雄氏「『和泉式部日記』の一考察―矛盾面からうかがえる基本構造―」（「言語と文芸」昭和三七年三月）など

＊2　針本正行氏「和泉式部日記の虚構性（二）―〈女〉と宮の内面描写を視点として―」（昭和女子大学「学苑」昭和五六年一月）

＊3　久保木寿子氏『実存を見つめる　和泉式部』所収「『和泉式部日記』の方法」（新典社・平成一二年五月）、「『和泉式部日記』の構成試論」（「国文学研究」昭和五八年三月）

＊4　「和泉式部日記」の作者について（「国語国文」昭和三三年四月）

＊5　『和泉式部日記』本文の掲示には、便宜上、三条西家本を原則として用い、適宜漢字を宛て、句読点を施した。なお、各引用部分に丸数字で通し番号を付した。

＊6　「正月一日」の記事では、院の拝礼に参じた帥宮の若々しい美しさに、和泉式部が「わが身」を恥ずかしく思う場面が描かれる。「宮」と「わが身」が対照的に扱われているのは疑いないが、もとより二人の共感を描出するものではない。『日記』では、和泉式部の宮邸入り後は散文のみの叙述になるなど、文体意識が変化しており、宮邸入り前と同列に扱うことに疑問が残る。

＊7　寛元本系統諸本には「女」の語は見られない。

＊8　拙稿「『和泉式部日記』の享受に対する一視角―『和泉式部集』日記歌再考―」（関西大学「国文学」平成一一年九月）

（ふじかわ　しょうこ／本学非常勤講師）